



令和4年度

鹿児島県の教育

8月号

巻頭言



一般財団法人鹿児島県校長会館理事
県連合校長協会高等学校長部会副部長

鹿児島中央高等学校
大脇俊朗

「ともに希望を語る」

新型コロナウイルス感染症の世界的感染拡大から三年目となったが、収束は未だ見通せない状況である。学校では、生徒の学びを止めないことを第一に、教育活動を展開している。現在高校三年生は、コロナ禍の中入学し、高校生活を送ってきた生徒たちとなる。学校の教育活動が制約を受ける中で、生徒が笑顔で一つ一つのことをやり遂げていく体験を積み重ねたいと願い、知恵を絞りながら教育活動を展開する現状はまだ続きそうだ。

フランスの詩人ルイ・アラゴンの「学ぶとは心に誠実を刻むこと。教えるとはともに希望を語ること」という言葉が胸に響く。学校とは、生徒たちとともに希望を語り、未来を切り拓いていく場である。よりよくありたい、ともにありたいという思いを起点として、未来志向の教育活動を展開していきたいと考えている。

AI等の科学技術が急速に進展し、変化を見通すことができない現代社会においては、自らの頭で思考し判断する力や、周囲と力を合わせて課題解決に向けて取り組む対話力が求められている。本年度から、高等学校でも新しい学習指導要領が学年進行で実施され、学力の三つの要素「知識・技能」「思考力・

判断力・表現力等」「学びに向かう力」をバランスよく育み、主体的に学び、持続可能な社会を担っていく力を備えた生徒を育成していかなければならない。

また、グローバル社会への対応も重要な課題である。世界に目を向け、国際的視野を広げる機会を持つとともに、自国のこと、自らのアイデンティティを考えることが必要である。今から二十五年前、文部省の日米国民交流事業で、米国ミズーリ州に三か月間派遣された。アメリカの教育機関を視察し、先進的な取組に触れる中で、日本のことを考え、改めて日本の教育の良さを自覚したことを思い起こす。グローバル社会において、言語の運用能力を高めることは必須として、世界の多様な人々との交流の機会を通して、日本人としての感性、ものの見方考え方について自覚的となるとともに、多文化共生社会の実現を目指していくことを実感させたい。

教育における不易と流行を見極めながら、時代の要請に応えるべく、「社会に開かれた教育課程」を展開していかなければならない。ポストコロナを見据え、生徒、職員とともに希望を語ることを進めたい。

令和4(2022)年8月号

一般財団法人鹿児島県校長会館

〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13

振替 02030-1-3192

TEL 257-9676 FAX 257-9679

(有)アクト印刷

鹿児島市東坂元二丁目29-1

TEL 247-1605 FAX 247-2844

* おもな内容 *

巻頭言	1	話のひろば	13
随想	2	読書案内	15
提言	4	趣味・文芸	18
わが校の学校経営	6	郷土の紹介	19
子どもが輝く教育	8	一般財団県校長会館だより	20
心に残るひとこと	10	編集後記	20
ある日の校長講話	12		



困窮は頑張らねばならないことだけ 教えてくれるから楽、夢も叶う

元いちき串木野市長 田畑 誠 一

今から六十七年も前、昭和三十年、敗戦からまだ十年で社会は荒廃し、人々の心まで荒んでいた時代、国民はこぞって不足不満を言わず、ひたすら復興に励んでいた。私はこの年、中学校を卒業、母より家計を助けてくれと泣かれ六人兄弟の長男として、わずか一週間後、身長百五十四cm（現在百七十二cm）、体重四十六kg（現在七十三kg）吹けば飛ぶようなひ弱な体で、サバ釣りに乗船した。

「人間は、正直でないといけません。陰日向があつてはいけません。人が見ていないところではなおさら働くんですよ。人をこなさない（いじめない）のですよ。人様に物をあげる時は良い方・大きい方をあげるんですよ。金鳥（銭鳥）という鳥は、難儀という木にしか止まっています。若いときの苦労は、買ってでもするものです。」と母に諭され、社会人としての第一歩を踏み出した。もぎ取るように、進学を諦めさせての母の声。親として申し訳ない、すまない叫びを込めての精一杯の門出に贈った心だっただけだと思ふ。

船は三十六tの木造船で三十数名の乗組員、満船になり鹿児島港へ帰るまで六日間の操業であった。積んでいった水は、僅か四t。水は最後のご飯の仕掛け、味噌汁、お茶だけで、勿論、風呂なし。顔も歯も全て海水を使用し、水は命綱、血の一滴だった。どうして、水をもう少し

積まないのか答えは簡単である。水一t多く持つていくと、サバ一t少なくて帰る。漁獲高が減る分、配当金が減るので、ぎりぎりの航海だった。

六日ごとに入港すると乗船している父親の二人の子供、（鹿児島工業、実践女子校に進学していた）が必ず船にきた。食べ盛りの十代に下宿は麦飯、おかわりもままならない時代だったので、米のご飯が腹一杯食べられて、刺身に煮魚、生菓子と彼らにとつて六日ごとが最高の楽しみ喜びだったと思ふ。

入港ごとに会社が三百円貸すのだが、同期生二人の親は、一番最悪の苦いゴールデンバットを三個買って一本の煙草を三つに切つて二日にひと箱、竹のパイプでおいしそうに吸つておられた。残りの二百十円は、子どもに渡された。

私はその時、習つた「親思う心に勝る、親心」を思い出し、進学させなかつた母をずいぶんなじつたけれど、他人里から嫁に来て、相談するところを持たなかつた（父はマグロ出漁）母は、辛かつたんだと思ふことだった。

彼らが訪ねてきてくれるのは、嬉しいけれど、凛々しい学生服に制帽、清楚で可憐なセーラー服姿は、魚臭くて、顔はうるこの自分にはあまりに眩しく、羨ましかった。だから一度だけ、帽子をかぶらせてもらった。

一か月前までは、ラ・サール高校に進学した

略 歴

昭和五十年 串木野市議会議員（四期）
昭和六十二年 串木野市PTA連絡協議会会長
平成三年 県議会議員（三期）
平成十五年 串木野市長
平成十七年 初代いちき串木野市長（四期）

三人と彼らと一緒に生徒会だったので、同期生にご飯をついでやり、食べた後の茶碗まで洗うことはとても悔しく残念だったけど、今自分がしなければならぬことは、一人を笑顔で迎え、余つた生菓子も全部持たせて、六日後、また来いよと笑顔で送ること。それだけではあまりにも悲しいので、将来必ず追い越してみせると心に決意したものであった。

自分もやがて親になる、安定した収入がないと親の責任が果たせないと思ひ、商船に乗るため、神戸市に所在する海運会社に面接に行った。面接官は、海務部長であられる方だった。開口一番、いきなり「十八歳で基本給は五千五百円だけど君は十七歳だから百五十円安い、五千三百五十円どうかね」と問われたので、私は咄嗟に「給料は要りません。働かせていただきご飯を食べさせてもらうと良いです」と答えた。

部長はボンと膝を叩いて「君は若いのに見上げた青年だね。薩摩の男はやつぱり偉い。もう何も聞くことはない。ちよつとした日用品は会社で用意するので、このまま帰らずに大阪で乗船してくれ。」と採用された。給料が要らないと言つたのは、採用してもらいたくて上手を言つたのではない。そんなこと考え付きもしなかつた。働かせていただきたい！その一心だった。こんな環境の時代であつたことに感謝している。

商船に変わって驚いたことは、三つあった。一つ、漁船と比較して仕事があり楽すぎて申し訳ないくらい。その上、格段に安全であること。

一つ、食事がバラエティに富んでいて朝は卵、小魚、海苔つきと美味しく六十五年前だけでも一回は薄いがステーキが食べられた。

一つ、歌や映画のマドロスさんは縞のジャケットを肩にかけ、白い帽子、気は優しく力持ち、男らしくて人情もろいと格好いいイメージだったけど、いつの世も同じ、いじめを楽しむ先輩、最低野郎たちもいた。

「初めて食べる白いご飯は美味しそうですね。髪が伸びましたね。大阪の散髪屋は青と白と橙が斜めに入ったのが、ぐるぐる回っているところ。でも標準語が話せないの、行けませんね。」

こんないじめは、日常茶飯事で極めつけはカレーが出た時、一番最後に食事する私に待つてましたと三人組が来て、下から顔をくつつけるようにして、あなたのおんこの色とどうですか。ときた。十七歳は最も多感な時、我慢できずはしを置きベッドに行くと、薩摩のイモ侍さん、食わずに大丈夫ですか：等々、私は一切答えず無視した。

それから二日間、食べようとすると来る。何も食わずにはしを置いた。食べようと思えば、夜食もあるので夜中にいくらでも食べられたが、陰で食べるのは男の卑怯者だと水だけ飲んだ。十七歳は人間で一番元気な時、何日か食べない位で死んだ人は世界中にいない。力尽きて、倒れはするだろう。それまで貴様らは俺をいじめ続け切るか勝負だと決めた。

貴様らしくらい、コメー、ケチな野郎は、三年したら俺が使つてやる。(国家試験に合格すれば)

士官になれるから) 四日目の朝から「よう鹿児島の親分さん、おはようございませう。」と挨拶を受けるようになった。貧乏県と言われた鹿児島県からは乗組員二十五名の中、六人もいたが、みんな言葉の訛りに気が引けて内弁慶だった。十七歳だったけど、私は折に触れ明治維新は薩摩が成し遂げた。私の故郷旧串木野市羽島は、近代日本の黎明を告げた「薩摩藩留学生十九名の渡欧の地だ。誇りを持つ。我々は標準語もわかるし、鹿児島弁も得意だ。二か国語語れるのと同じだ。胸を張ろうと言うと鹿児島の先輩が、お前は優しい顔をしてカストロ(キューバの青年革命者)みたいなやつだと言われたりしていた。

十七年余りの船乗りから、幸運にも陸上で働くことになり、地域の方々より熱いご支援を賜った。更に県議会議員に駒を進めさせていだいた。更には、自分くらいの分際にはもったいないほど有難いことであった。

平成三年九月、県議会で長年、温め続けてきた薩摩藩英国留学生顕彰を県はすべきだと初質問で訴えた。県には関ヶ原敵中突破の壮絶無比の武士道があり、親の仇を打つ曾我どんの傘焼きがあるが、初代文部大臣の森有礼、大阪商工会議所設立の五代友厚、アメリカのブドウ王長沢鼎などなど、近代日本の礎を築いた大偉人ばかりである。混迷を極めた幕末の時代、外国では命の保証もない中、国禁を犯してまで、しかも薩摩藩だけではない日本の将来を憂い、雄飛した彼らの壮途は我が国が世界に威厳を示す、凄まじい史実・快挙である。命令を下した薩摩藩の度量と慧眼には感服するばかりである。その中でもう一つ、四人の子どもたちを殿様に差し出された町田家の両親の使命感に光を当てたい

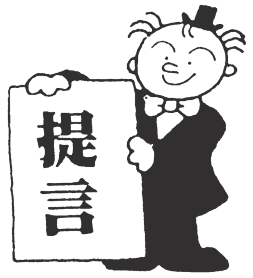
と私は思う。殿さまの命とは言え、長男だけは家継のためお許しを願ひ出たら許してもらえた筈。県議会で質問以降、機会あるごとに記念館建設を訴え続けてきた。お陰様で、平成二十七年七月、彼らの心意気と使命感、熱き思いの香りを潮風に乘せて記念館の完成を見た。県担当者の指導、時の伊藤知事さんの高配・地元市議会の同意、そして何より心を折られることなく目的に向かい、邁進できたのは、平成元年に地元、羽島で結成され彼らの偉業・功績を顕彰し続けてきた、羽島史跡顕彰会活動が根底をなす原動力だった。

おかげで、開館以来、二〇七、六七〇人(令和四年六月二十六日現在)の方に、ご来館いただき、只々ありがたく嬉しく、胸弾む思いがする。

記念館を拠点に、青少年たちが彼らの凄まじいまでの土魂を少しでも魂の中に、忍ばせてくれ、再びこの地から世界に向かって半径を描いて欲しい。そして併せて本県の観光振興に寄与できたらと願っている。どこまでも続く未来は、明日への希望の翼で飛ばたく宝、子どもたちである。夢を描いて、夢を食べて欲しい。心は拡く、丸く、太く強く勇敢(虎穴に入らずんば虎子を得ず)。それでいて、いつも何事も、相手の立場に立つて言動する優しく、健気な若者であって欲しいと重ねて、期待したい。

小生人様の二倍、現役で八十二歳まで働かせていただいた。本当に果報者である。誠に有難く感謝、感謝である。

カラスはカーカーと空を飛んでいるが、あれは、かねてかねてと人間社会に語り掛けていたのでは、そして、身をもって黒帯有段者の人間たれと促しているのではと思う。残された有難い日々は、負けることに骨を折る努力を紡ぐよう心掛けることを目指したい。



自ら学び共に伸びる

未来を生き抜く子どもの育成

伊唐小(北) 松本浩輔

一 はじめに

本年度、新任校長として着任して三か月が過ぎた。校長としての責任を痛感した日々である。的確な判断、管理能力、服務指導、学校における働き方改革等…。日々、校長室に掲示してあるグラウンドデザインを見ながら学校課題を解決していくために何が必要なかを考える毎日である。

ここ数年の社会の変化は激しく、数年前まで夢のようなことであったことが現実の世界になっている。これからの社会「正解のない問いに満ちた世界」とか「知を生み出すための知の世界」などといわれている。そこで、未来を生き抜く子どもの育成について考えていきたい。

二 「自分の考えを形成し学び合う」授業を

校内を回ると、子どもたちの笑顔や楽しく学習する姿を見るたびにうれしく思う。「今日は、とても反応がいいな。」「あれ、今日は定着ができていないかな。」などいろいろな表情がある。「授業の成果は、子どもの姿で語れるように」と常に校内研修で先生方と確認しているところだ。

各種学力調査の結果から、「読む力」の定

着が課題と挙げられることが多い。本校の課題でもある。一単位時間の中で、「読む↓考える↓書く」を連動させ、他者と読み取った内容を相互に比較・検討する時間を確保することが大切であると考える。「読む力」を高め、活用していくためには、個の読みを充実させていくことが前提としてあり、更に他者との交流活動を活性化していくことで、「読む力」を高め自分の考えを形成し学び合うことのように実感させていくことが必要である。

また、自分の見方や考え方のよさを他者とかかわりの中で感じ、学び合う態度を身に付けさせていくためにICT機器の有効な活用が大切になってくる。デジタル教材を活用すれば、一人一人の学習の進捗状況を可視化できる。また、ロイロノート等は、画面上で他者の考えを分類・整理し共有化することで自分の考えを形成する大事なツールとなる。

三 「本物を体験し、本物に触れる」授業を

本年度もコロナ禍でのスタートとなり、各種行事等を縮小・制限して実施したり、先生方は授業を工夫して行ったりしている。前述

したようにICT機器を活用し、オンラインで教室にいながら遠方の方々と交流する機会も増えている。職員もオンラインでの研修等も増えてきているが、画面を通してマスク越しのグループ討議では、表情を読み取ることができず伝わっているか不安に思うことも多々ある。

学校では、生活科や総合的な学習の時間に学校を飛び出し、地域に出かけて学ぶ学習が多く展開されている。本校は、極少人数の学校である。たくさんの方との交流など難しいことは多くあるが、「人数が少ないからこそできる」への発想の転換を合い言葉にして、「体験活動を通して、子どもの個性を伸ばす教育」を学校・家庭・地域が連携し、その取組を強化しているところである。地域のふるさと先生(学校応援団)を活用し、「わくわくどきどき」の地域の特徴を生かした体験活動を多く設定していくことで「そうか、なるほど、もっと知りたい。」という充実した学びにつながる。この変化の激しい時代だからこそ、子ども同士のかかわり合いや地域社会での体験活動など「本物を体験し、本物にふれる活動」の重要性が高まっている。

四 おわりに

「学校教育にとって大切なことは何か」常に判断の連続である。新任校長として一年目。先輩の校長先生方から多くのことを学び、新任校長だからこそできることがないかを常に問い続けながら学校運営を行っていきたい。



校種間で連携したスマホ対策を

蒲生中(始) 西 ゆかり

「スマホ」この魅力的な情報端末をどのように使いこなせばいいのだろうかと思う。

三十年前は、クラスの生徒が万引きをしたとコンビニの店長に謝罪に行った。生徒同士が喧嘩して救急車をよんだこともあった。しかし今は、生徒指導委員会の内容はもっぱら不登校とネットトラブル、そして特性のある生徒への対応・・・教師に反抗したり煙草を吸ったりする生徒はあまり見かけなくなった。

以前、勤務していた中学校のPTA会長があちこちの講演会でスマホの利用の実態について学習してきて「これからはもう子どもにスマホを禁止できない。使い方を考えさせよう。」という提案をしてきた。当時、私は「子どもにはスマホを持たせるべきではない。」と考えていた。持たせれば使うことを我慢できない。だからできるだけ大人になってから持たせるべきだ。そう言えるほどのスマホの所持率だったと思う。会長のこの提案にも、果たしてそれでいいのか、と異議を唱えた。しかし会長はPTAの取組として進めるからと役員会で内容を話し合い、会費でラミネートして全戸に配布した。

「ケータイ・ネットスリプ宣言」と題されたその取組は、全家庭で統一した指導ができた。今思えば画期的な取組だったと思う。

一 子どものスマホ利用を保護者が閲覧

あれから七年、想像をはるかに超える速さで情報端末利用の低年齢化、ゲーム使用の低年齢化が進み、その影響は大きな問題となっている。SNSのトラブルでは、この子がこんなに攻撃的な文章を書いたのか！などと驚くと同時に、ほぼ全員の保護者が子どもものスマホの利用内容を知らないことに驚く。トラブルが発生し、担任から中身を確認するように言われて初めて、我が子がどのような人たちとどのような内容をSNSでやり取りしていたかを知るのである。スマホを買い与えた時はまだ子どもで、そんな使い方をすると夢にも思わなかったのだろうか。そのたびに、トラブルになってからの指導では手遅れだと感じる。保護者にもこのような実態を理解してもらい、スマホを買い与える時の約束事として、保護者が一緒に使い方を確認しながら、できればその内容も閲覧できるようにしてほ

しい。そうすることで子どもだけでなく保護者自身をトラブルから守れるのではないだろうか。

二 情報端末利用と不登校や発達特性との関連

不登校生も年々増加しているが、こちらも低年齢化しているように思う。おそらく情報端末利用の低年齢化、ゲーム使用の低年齢化と無関係ではないだろうと思われる。朝の登校をしづれば、根負けして仕事に出かける保護者を送り出し、ゲームやユーチューブにふける。これでは学校に復帰できるはずはない。不登校生への対応は、担任や学年部にも大きな負担になっている。ゲームを買い与える時にもまた、学校がある時間には使用しないなどの約束事をしてほしい。このような生活習慣への影響だけでなく、子どもの脳に与える影響も非常に心配である。不登校の生徒と話をしているとき、私の言葉が届いていないのでは？と心配になるような目をしている生徒が増えたと思う。

三 幼・小・中・高が連携した指導の必要性

子どもの情報端末の利用についてどのような対策を講じればいいのか。中学校だけでは対応できない。気が急ぐばかりで有効な手立てがなく焦燥にかられることがある。まずは、幼稚園、小学校と中学校、高校がタッグを組んで、それぞれの学校における現状と問題点を共有し、子どもの成長の早い段階で共通認識のもと家庭と学校が連携して教育に当たることができればと思う。そして、スマホ等の文明の利器から子どもを守りたい。

わが校の



学校経営

夢や目標をもち、自らを律しながら、 共に学び共に伸びる子どもの育成

坂元台小(市) 山田 哲夫

一 はじめに

本校は、鹿児島駅の北西標高約百二十六m、玉里団地の東端にあった旧鹿児島商業高等学校野球場グラウンド跡地に昭和六十年に開校し、創立三十八周年を迎えた。令和四年度は、児童数四百十四人でスタートしたところである。

校区は、坂元町の一部、東坂元二丁目の一部、玉里団地二丁目、西坂元町からなっている。もともと玉里団地には、坂元小学校があり、二丁目だけが校区編入され現在に至っている。一時期児童数の減少が顕著な時期があったが、近年は、児童数が四百人前後で推移している。

地域住民や保護者は、県内各地からの転入者が多いが、教育への関心は高く、学校教育活動にも協力的である。

二 学校経営の重点

本校の教育目標を達成するため、本年度の重点を次のように設定した。

- 「新しい生活様式」を踏まえた感染防止策の徹底と教育活動の充実
- 人権教育を基盤とした教育活動の推進
- 確かな学力の育成

「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業改善

○ 様々な危険を自ら感知し回避することができるような力を育てる安全指導の推進（KYTの積極的推進による危険予知・回避能力の育成）

三 特色ある教育活動

(一) 「せばる隼人舞」を通じた伝統芸能の伝承
本校区には、平成四年から「せばる隼人舞」とよばれる神舞の保存会が発足している。例年、十一月二十三日に披露することになっており、鹿児島商業高等学校や鹿児島東高等学校、坂元中学校の生徒、そして本校児童が参加して伝統芸能の継承活動を行っている。



三年生では、総合的な学習の時間を通して、「せばる隼人舞」について調べるように位置付けている。神舞の練習は、地域の指導者を招聘し昼休み等を利用して行っている。新型コロナウイルス感染症の関係で二年間実施できていないが、今年度は披露できるように

関係者一同願っている

(二) 小・高連携授業

本校は、鹿児島商業高等学校に隣接していることもあり、商業高等学校の生徒が児童へプログラミングの授業を行う取組がある。児童にとつては、高校生を身近に感じる機会になり、キャリア教育の視点からも大切にしている。また、高校生にとつても、学んだことを教えることで自身の学びをより深くする機会となっている。

四 地域との連携

学校や家庭だけの取組で健やかな成長を促すことは難しい。とりわけ、校区まちづくり協議会との連携が大切である。幸いに、協議会では副会長として関わっており、あいさつ運動や見守り活動等の協力、新型コロナウイルス感染症対策等についても御理解と御協力をいただいている。

令和五年度から、本市の全小中学校がコミュニティスクールとなることを見据えて、新たな連携の姿等を構築していく必要がある。

五 おわりに

本校は、平成二十三年の映画「奇跡」のロケ地になった。雄大な校舎島を正面に見る景観は本当に素晴らしいものである。

そして、この地を故郷として、たくましく生き抜く児童の育成に努めるように、日々気持ち新たに臨んでいる。





創立時の思いを将来につなぐ

喜界高 福元 幸一郎

一 はじめに

本校は、アメリカ軍政下、高等普通教育を熱望する親たちの切実な願いと立志向学の情報にもえる若者たちの意欲による設立運動により、昭和二十四年に喜界町早町村学校組合として設置され、昭和二十八年の奄美群島日本復帰により鹿児島県立喜界高等学校となった。昭和四十年代は、生徒数も多く普通科二学級・商業科三学級であったが、現在は各学年普通科・商業科それぞれ一学級、全校生徒百四十八名の生徒が在籍している喜界島唯一の高校であり、最高学府の学校として地域から期待されている。今年で七十三年目となる。ほとんどの生徒が喜界中からの入学であり、国公立大学希望の生徒から就職希望の生徒まで多様な進路希望に対して、授業や個別指導で対応して夢の実現に取り組んでいる。また、本校の特色である、連携型中高一貫教育は、



平成十五年度から町内三中学校一高校で本格的に導入され、平成二十四年度から一中学校一高校になり現在に至っている。

二 本校の特色と教育活動

(一) 学科の特色

入学生のほとんどが喜界中からであり、多様な進路選択を見据えて、普通科ではカリキュラムに多くの選択科目を設定し、二年次より三つのコースで対応している。さらに習熟度別授業により授業理解力の向上に取り組んでいる。最近は大学希望者も増加し、なかでも国公立大学へ三十％、四十％の合格者が出るようになった。そのことがこれまで島外の普通科高校を目指した中学生が本校に入学をしてくれることに繋がっている。商業科においても専門科目の学習を通して資格取得とともに地域の資源を生かした産業や観光等と内容とする課題研究にも取り組み、地域と繋がりのある学習活動を行っている。

(二) 連携型中高一貫教育

基本理念の第一は「六年間を見通した教育活動による個の伸長と生きる力の育成」

である。年二回の中高合同職員会（中高全職員・町教育長・町指導主事等）の全体会及び各部会において新年度の取組企画と内容充実に取り組んでいる。乗り入れ授業や到達度テストなどによる学力向上、中学生に対してキャリア教育の一環として高校生による進路体験発表を中学校でグループ学習の形で実施している。また、高校へのスムーズな移行を目的として中学三年生の高校部活動への参加等も行っている。

(三) 探究活動「がじゅまる」

中高連携における郷土教育「きかい学」を高校では「がじゅまる」と称して実施している。講師として地元の役場・観光協会・企業・喜界島サンゴ礁研究所等が協力的であり、探究学習の方法から始まり、行政、観光、産業、自然など多分野の講師として体系的な探究活動に協力をいただいている。最終的には中高合同発表会による「喜界島への提言」に繋がっている。この活動は少子高齢化が急速に進む離島において、将来を担う若者が喜界島へもう一度帰ってくるように、また帰ってこれなくても多くの人々が集う島になるように貢献する人材として送り出すことができるようにという責務を担う活動でもある。

三 おわりに

毎年新入生に第一期卒業生から創立当時の状況や思いを語っていただき、学校や生徒に対する地元住民の思いを生徒も職員も確認している。この思いを日常の学校生活や教育活動の中で実現できる学校にしていきたい。



地域の特色を生かした教育活動の取組 ～ 開拓者精神の強い心と身体を育てる教育 ～

東原小(隅) 森 山 新 二

一 はじめに

本校区は大正十三年の東原台地の入植から始まり、大部分の人は第二次世界大戦後に入植している。大変な苦労の中で、困難にめげず、この地を開拓してきた歴史がある。校訓「拓き、創り、はばたけ」は、台地を切り拓く強い心、自然を創造することへの感謝、開拓の地から世界にはばたく心を育てたいという先人の思いが込められている。このような開拓者精神に富んだ地域の特色を生かし、本校では、次のような取組を行っている。

二 取組の実際

(一) クロスカントリーでの体力向上

本校では、始業前の時間帯に朝のかけ足運動に取り組んでいる。一般的な学校であれば、運動場の百五十メートル程度のトラックを周回するところであるが、本校では、運動場全体を使って走っている。手入れが行き届き短く刈り上げられてはいるが、土ではなくてこぼことした草地を走る。それでも子どもたちは、笑顔で楽しく走っている。途中には、季節ごとに彩りのある木々や草花、ビオトープの水辺の生き物たち、変化に富んだコースが走るのを楽しませてくれるからだ。そして、このコースでそのまま持久走大会を行うことにしている。名前も持久走大会ではなく、起伏に富んだコースにちなんで「クロスカントリー

大会」だ。

冒頭に紹介した、朝のかけ足運動のコースも、もともとは、このクロスカントリー大会が始まりである。これまでの校外を走る持久走大会は、学校沿いの幹線道路を走っていたが、車道を守るため特に大型車の往来のあるときは危険な場合もあり、学校とともに協力をいただく保護者の方々も運営に苦勞していた。そこで、令和元年度から、直線コースだけでなくカーブも多くある上、高低差もあり、土・砂・芝・砂利・コンクリート上を走るという変化に富んだユニークなコースを設定することとなった。距離は、学年ごと三コースにわけ、一・二年は千mでトラック二周と校内の外周二周、三・四年は千五百mでトラック三周、外周三周、五・六年は、二千mでトラック四周と外周四周。各学年の子どもたちは、保護者やスタッフが飛ぶ中を力一杯走る。コースができ、学校が休みの日は、親子のコミュニケーションを兼ねてコース試走をする家族もあり、走った子どもらは、「違ったコースで面白い。」「きつかったけど、山を登って、だあとと下るところが楽しかった。」などの感想があった。練習の時からすると自己ベストを更新している子どもが多かった。

(二)

外国人参加の授業

本校区には、外国人技能実習生のいる農業法人があり、業務提携により、この方々に外国語等の授業に参加していただくようにしている。

昨年は、カンボジア出身の方に外国語の授業に参加していただいていた。自己紹介の後、子どもが身近な人の紹介カードを英語で作るのをサポートしてもらった。友人や両親の得意なことについて子どもが話すのを聞き、「I can (できる)」を使ったらいいよ。」などとアドバイスをもらった。授業の終末、英語についての多くのアドバイスをいただいた技能実習生が、実は母国では、主にクメール語を話しているということを知り、子どもは驚いていた。そして、カンボジアの公用語クメール語と母国を愛する技能実習生の話を聞き、国や郷土を愛する気持ちについても学ぶことができた。

子どもからは「カンボジアの人と話したのは初めて。英語が上手で自分もそうなりたいと思った。普段は、クメール語を話すと聞いてびっくりした。」等と感想を語った。外国人技能実習生からは「楽しかった。また、学校に来て、一緒に勉強したい。」との感想をいただいた。

三 おわりに

これらの活動により「困難にも負けない強い心と身体」「自然への感謝の気持ちと創造性」「世界にはばたく自信と実践意欲」の育成を目指している。今後も、郷土を愛し、世界に羽ばたいていけるような強い心と身体をもち、開拓者精神に富む子どもが育つよう、さらに学校・家庭・地域との連携を密にした教育活動の推進に努めていきたい。



じっくり考えて

自ら正しい判断ができる生徒の育成

吾平中(隅) 松下 幸男

一 はじめに

本校は大隅半島の中央部に位置し、神代三山陵の一つ吾平山上陵の麓、始良川流域の田園地帯に囲まれた自然豊かな場所にある。昭和二十二年に開校し、今年で創立七十六年を迎え、中学校区内には鶴峰小、吾平小、下名小の三つの小学校があり、現在生徒数は二百十四人、学級数八学級(特別支援学級二学級)である。

学校教育目標「すぐれた知性と豊かな心、たくましい身体を備えた人間性豊かな生徒を育成する」、校訓「好学・規律・協力・剛健」のもと、知・徳・体の調和のとれた教育を目指している。

また、本校は青少年赤十字加盟校として「気づき、考え、実行する」の理念のもと、生徒指導スローガン「考える力を育てる吾平中」しつかり考えて自ら正しい判断ができる生徒の育成」を掲げ、自治能力を育て高める生徒会活動の充実に取り組んでいる。

二 生徒会の常時活動

(一) 語先後礼の立ち止まり挨拶

本校では「日本一のあいさつ」を合い言葉に、生徒会役員の朝の挨拶運動はもとより、校内での語先後礼による「立ち止まって」「相手の目を見て」「大きな声で」の挨拶を生徒会の取組として行っている。休み

時間になるとあちらこちらで挨拶の声が聞こえ、廊下では、かなり遠くの方から挨拶をしてくれる生徒もいるため、後になって自分に挨拶をしてくれたことに気付くこともある。

気持ちのよい挨拶が徹底できている理由は、生徒会本部や学級の係の生徒が日頃の挨拶の様子を確認し、生徒朝会や学級で呼びかけを行っていることにあり、このような活動が生徒会の中に伝統として根付いている。

そして、挨拶は校内にとどまらず地域でもその輪が広がり、最近では一年生が吾平山上陵で清掃活動を行ったときにも「生徒たちが元気のよい挨拶をしてくれて、気持ちよかった。」という声や、先日も電話で、「生徒が横断歩道を渡った後、停車している車に立ち止まって挨拶をしてくれ、うれしくなりました。」といった言葉を聞いた。学校での取組が地域でも実践されていることに喜びを覚えるとともに、家庭や地域でも生徒たちの成長を支えていただいていると感じた。

(二) 履き物を揃える係活動

本校に赴任して、挨拶とともにすばらしいと感じたものの一つに靴箱に入った靴がいつもきれいに整って並んでいることがあ

る。
朝の挨拶運動を終えて生徒玄関に立ち寄ると係の生徒たちが毎朝、履き物がきちんと揃っているか確認をしている。少しでも揃っていないか、ゆがんでいたりしたら、教室に戻りその本人を呼んで、何処が揃っていないかを説明してきちんと並べさせている。

この活動を見ていてうれしくなるのは、二人の係が相談しながら点検しているところである。これくらいいいのではないかと、思う靴の状態でも、「これどう思う?」「これは靴自体がゆがんでいて揃わないじゃないかな?」「私はここが揃ってくれればいいと思うけど呼んでくるレベルかな?」と悩みながら二人一組で確認している。靴の持ち主を呼んできてちゃんと並べてもらうにはそれなりに納得してもらう理由を伝えなければならぬ。係としての責任感からきちんと並べてほしい、けど納得してもらうためにどう説明したらいいか、このことを真剣に考えている姿が毎日のように繰り返される。そして、呼ばれてきた生徒は説明を聞きながら、嫌な顔もせず靴を少し動かし、少し遠くに離れて整っていることを確認すると教室に戻っていく。

三 おわりに

挨拶も靴揃えも、毎日の何気ない常時活動だが、生徒たちが自分たちで考え、実行している。まだまだ十分でない部分も多いが、生徒会専門部活動における日常活動に青少年赤十字の考えを深く浸透させ、さらに子どもたちが輝く教育を教職員がチーム一丸となって実現させていきたい。



「必要とされるとき 人は輝く」

星峯東小(市) 田 中 竜 太

二校目の勤務校の頃の話であるので、もう三十年以上前の話である。何気なくテレビをつけると、このタイトルのドキュメンタリー番組が始まった。舞台は高齢者の介護施設。認知症を発症している方も多く、入所者の表情は想像していたものに近かった。

そこに交流活動で入室してきたのが、近所の園児たち。昔の歌や遊びを通して、交流を深めようというのである。正直、無理があるのではという憶測が頭をよぎった。ところが、次の瞬間、私の目は釘付けになった。先程までの表情とは打って変わって、彼ら彼女らの目が輝き出し、表情がみるみる柔らかくなっていったのである。今しがたのことは思い出せなくても、昔興じた遊びや歌は忘れていないとはよく聞く話である。食い入るようなまなざしで、ただひたすらに真似しようとする人生の後輩たちの前で、

時には厄介者扱いされたり、子ども扱いされたりしている入所者が、自己有用感を抱き、生き生きと自己実現を果たしている姿であった。直後にエンディングを迎え、再び表題のタイトルが映し出された時の感動は、今でも忘れない。思わず手帳に書き留めた言葉であった。「愛の反対は憎しみではなく無関心」誰かが自分の存在に関心を示し、必要としていてくれることが人間にとってどれほど生きる活力になるかを物語った番組であった。

現役最後の勤務校となる本校の校訓は「ひとみ輝き独り立ちできる星峯東の子」。赴任直後の学校便りに、運命的な出会いとして、先の言葉を紹介した。職員にも常々「子どもたちに自分が必要とされることが実感できるような授業や学級・学校づくりを。」と訴えている。残り一年を迎えた四月、校長室に改めて先の言葉を掲示した。毎朝、この言葉と向き合いつつ、「自分はこの学校に必要とされる校長であるか。」と自問自答する日々である。そして、やがて学校を離れてからも、必要とされる人間となれるよう精進していきたくと考えている。

誰かが見てくれているという安心感

鴨池中(市) 有 村 忠 裕

今から三十数年前、離島の全校生徒六十人ほどの学校に勤務していたときのことです。月に二〜三回、仕事が休みの日には、必ず、学校に

子どもの様子を見に来られる父親がいました。初めて授業中に来られた時は、びっくりして戸惑ったのですが、学級の子どもたちは落ち着いたもので、ニコニコしながら父親を迎え入れるのです。父親は、教室に入ると、まず、後ろの棚を見回し、脱ぎっぱなしの体育服があればきれいにたたんだり、学級文庫の本を整理したりします。それが終わると、自分の子どもはもちろん、他の生徒のところに行つて「頑張っちゃねね。」「よか発表じゃった。」と、一人一人に励ましの言葉をかけます。また、授業中の私の問いに、「誰も発表せんなら、おじさんが発表すつど」とか言つて、授業にも参加するのです。ある時、父親に学校参観の意味を伺つてみました。その返事は、「誰かが見てくれているという安心感。それを子どもたちが感じてくれたら。」

父親は二年前に妻を病気で亡くし、二人の子どもを育てていることを後で知りました。父親と子どもたちとの良好な関係を見ながら、「人は理解してくれている人には安心して心を開いてくれる」という大切なメッセージを私に伝えたかったのだと思いました。さらに、この言葉は、一見、父親自身に向けられた言葉のようですが、実は教師の態度や姿勢、教育のあり方に大きな示唆を与えてくれているようにも感じました。

中学校を卒業すると親元を離れて島外の高校へ進学する子どもたちです。「愛情をいっぱい受けて育つた子は自然と自立する」という言葉があるように、この出来事を機会に、子どもと

真正面から向き合い、共に苦しいことがあっても、子どもの夢の実現に向けた後押しをしっかりして、こうと心に決めたことが、今懐かしく思い出されます。

「まあ いっとつ まて」

楠隼中高 徳留敏郎

生来優柔不断で「石橋を叩いても渡らない」性格の私が、仕事がかどらず、次から次に山積みになっていく書類のため息ばかりついていた今から十年ほど前、当時の上司から言われた言葉である。

ある日、他の部署の懸案に対して担当係としての見解と対応を求められた。回答期限まで約二週間。当時の私の愛読書は「インバスケツト思考」。その本によれば、本件事案は「重要だが緊急ではない」部類に属し、この類の仕事を溜めることがストレスになるとのこと。私は即座に前例踏襲で回答案を作成し、上司に相談した。私の案を一通り見た上司は言った。「まあ、いっとつ、まて（一時、待て）」この上司がよく発する言葉だった。「何を言ってるんだ、この人はどこを直せという指示もなく、ただ『待て』とは。私をメンタルで潰す気か。」と少し腹が立った。とはいえ上司の命令なので、すごすごと引き下がり、書類を引出しに入れ、モヤモヤしたまま一日を過ごした。すると、帰宅途中の車内で、ふと一つの案がひらめいた。また、入浴中

にはさらに別の案も浮かんできた。

数日後、複数の案を携え、再度上司に相談に行った。上司は私の説明を聞き終えた後、静かに口を開き、次々と問題点を指摘し、結果的に私の案は跡形もなく消え去った。

当時は振り返ると、根拠もなく、上司に相談するレベルにもない状態で、意気揚々と提案した自分を恥ずかしく思う。また、じつくりと考えもせずに早く仕事を終わらせようとしている部下に対する「まあ、いっとつ、まて」という言葉の奥深さを感じる。

科学技術の目覚ましい進歩によって、私たちの生活は必要な情報が瞬時に得られるようになった。他方、熟考したり、試行錯誤したりする時間は「無駄なもの」となってはいないか。そういう私は、職員からの相談に対して具体的に指示をし過ぎて、「いっとつ、まて」ない自分を反省する毎日である。

「選択的注意」を働かせる

副田小(北) 脇輝美

本校に赴任して三週間ほど経ったころ、郵便物を出す機会があった。ポストは、本校から一キロメートルほどのところに郵便局があることを確認していたので、車で出かけて投函した。同じ日、今度は事務職員が、郵便物を出すと行って徒歩で出かけて行った。すると、ほんの五分も経たないうちに戻ってきた。聞くと、学校前

の坂のすぐ下にあるポストまで行ったそうだった。驚いた。そんなところにポストがあったのだろうか。わたしが、毎日歩いている歩道である。ポストに気付かないはずがない。気になって、本当にポストがあるかどうか「ポスト、ポスト」と注意しながら、すぐ確かめに行ってみた。すると、ポストは堂々と確かに目の前にある。こんなに近くにポストはあったのだ。それまで毎日見えていたはずなのに、わたしはそれを見ていなかったのである。ふと「選択的注意」という言葉が頭をよぎる。

「選択的注意」という言葉を知ったのは、二十年ほど前のある研究会のことだった。様々な情報があふれている状態の中から、選択的に注意を向けて確かに認識するということができた。また、その物事に関心の度合いが強ければ強いほど注意が喚起され、ちよつとしたきっかけでそれがはつきりと表に出てきて新たな発見につながるという。

考えてみると、日常生活の中では見えているのに見ていない、聞こえているのに聞いていないということがよくあるように思う。自分に関わりがないことには注意が向かないのである。反対に、騒然とした中でも「先生」や「学校」などの言葉が聞こえると、そちらを振り向くほどよく気付くものである。

学校生活の中においても常に生じる「選択的注意」。魅力ある学校にしていくためにも、足下にある大事なものを馬耳東風としないように見逃さず、聞き逃さず、言い逃さず、「選択的注意」を研ぎ澄まし、存分に働かせたいものである。



笠沙小学校の自慢は何だろう？
自らが頑張ってよりよい学校を
つくっていいこう！

笠沙小(南) 井 芹 賢 二

校長先生が笠沙小学校へ来たばかりの時、「笠沙小学校の良いところはどこだろう」と思い、みなさんにアンケートをお願いしていました。今日は、その結果を紹介したいと思います。アンケートには、たくさんの笠沙小学校の良いところを書いてありました。その中でも、みんなが思う笠沙小学校の良さベスト三を発表します。第三位。「校庭や体育館が広い」です。第二位は、「あいさつ(語先後礼)」です。そして、第一位は、「笠沙太鼓」でした。五月三日の笠沙フェスタのオープニングでも素敵な演奏ができましたね。

でも、校長先生には、少し残念なアンケート

結果でした。笠沙小学校の全員がこの「笠沙太鼓」の演奏を「良いところ」「自慢」だと思っているのかと思っていました。他の回答を見ても、物や周りの自然環境が「良いところだ」と答えている人が多いようです。みんなが頑張っている人ではないでしょうか。笠沙小学校のみなさんが頑張っていること、笠沙小学校のみなさんが自慢できること、笠沙小学校のみなさんができないことはありませんか？そう、笠沙太鼓ですね。校長先生もいろいろな学校を見てきましたが、学校の子どもたち全員で太鼓の練習をして、全員で太鼓演奏を発表している学校は、笠沙小学校が初めてでした。しかも、五・六年生がリーダーとなって、自分たちでしっかり練習している姿を見て、校長先生は感動しました。すごい！と思いました。だから、アンケートにも「笠沙太鼓が自慢です」とみんなが言うのかと思っていました。二十一人中六人だけでした。

練習の時、なんとなく太鼓をたたいている人はいませんか？太鼓練習の時間があるからやらされて練習していませんか？みんなの先輩たちもがんばってきた、お父さんお母さんたちの頃から引き継がれてきた笠沙太鼓です。笠沙小学校のみんなにしかできないこの笠沙太鼓を一人一人が更に意欲的に努力することで、それが自信になり、他の面でも元気に活躍できる笠沙っ子になれると思います。自分たちの頑張りで、更に笠沙小学校を元氣な学校にしていきたいましよう。

若き日の志 (志のマンガラチャート)

有明小(隅) 岩 屋 高 広

皆さんは、大谷翔平選手と地元の先人野井倉甚兵衛さんの共通点は何分かりますか。

大谷翔平選手は、現在、アメリカの大リーグでピッチャーとバッターの「二刀流」として活躍している選手です。その大谷選手は、岩手県の花巻東高校出身で、高校生の頃から大きな志(目標)をもっていました。その志を達成するために、マンガラチャートという表を作りました。大谷選手の一番の目標は、「八球団からドラフト一位」に指名されることでした。この志を達成するために、八つの志を考えました。①体づくり②人間性③コントロール④メンタル⑤キレ⑥スピード百六十キロ⑦変化球⑧運です。また、この八つの志一つ一つを達成するための更に八つの具体的な行動を考えました。その中に「運」があります。運の周りを見ると「あいさつ」「ごみ拾い」などがあり、大谷選手は、しっかり実行しています。

次に、地元の先人の野井倉甚兵衛さんです。何をした人か分かりますね。十七歳のときに、野井倉台地に菱田川から水を引いて、お米を作ることを考え、それから六十年後、七十七歳になってようやく用水路が完成しました。校長先

生は、野井倉甚兵衛さんのマンダラチャートを用意で作ってみました。中央に大きな志として「用水路を作ること」を書き、志を達成するために、①「土地を知る」②「工事の仕方を知る」③「お金を集める」④「仲間を集める」⑤「国語力を付ける」⑥「計算力を付ける」⑦「体力を付ける」⑧「あきらめない心を身に付ける」です。さらにいろいろな志を立てて、用水路を完成させました。

さあ、皆さん、この二人の共通点は、何か分りましたか。そうです。「十七歳という若いときから大きな志を立てたこと」「あきらめない心で頑張ったこと」です。皆さんも、小さな志からでも構いません。マンダラチャートを作って、志を達成するために、どうしたらいいか考えてください。そして、いつかは、大谷翔平選手や野井倉甚兵衛さんのように大きな志を立てて、最後まであきらめない心で頑張ってもらいたいと思います。

「力を合わせよう」

申木野養護学校 榎 本 博

※ 児童生徒総会での各委員会役員への任命書
授与の後の話（校内テレビ放送）

みなさんは、なぜ児童生徒会活動をするのか知っていますか。児童生徒会は、みんなの学校生活をよくするためにあります。学校生活がよくなるということは、みんなが楽しく過ごすことができるということです。笑顔で挨拶をしたり、仲良く遊んだり、一緒に勉強したりできる学校をつくるということです。

さつき、新しい役員さんたちの紹介がありましたね。学校をよくするのは、役員さんたちだけではありません。申木野養護学校のみんなが協力や応援をすることが大切です。例えば、図書委員会の人たちのために、図書室の本を大切に扱うということも、みなさんができる協力や応援です。報道委員会の人たちが放送するとき、静かに聞くということも、みなさんができる協力や応援です。美化委員会の人たちが掃除をしているときに、「いつもありがとう。」と言ったり、一緒に掃除をしたりすることも協力や応援です。ほかに、友達に元氣よく挨拶をしたり、仲良くしたりすることも、楽しい学校にするために、みんなができることです。校長先生からみなさんへお願いがあります。みんなが力を合わせて、にこにこ笑顔がいっぱいの申木野養護学校にしていきたいと思います。



困難を超えた 先に見えるもの

水引小(北)

柳田 健一

コロナ禍になり三年目を迎えた。集団生活から成る学校は、感染リスクが高く、登下校を含む学校生活や全ての教育活動に実施可能かどうかを含め、実施内容や方法を検討し、感染対策を講じることが必須となった。誰もがこれまで経験したことのない対応は、情報収集し校内外で何度も検討を重ね、試行錯誤しながら、徐々に「自校化」した感染対策を施す過程で、新しい生活様式が子どもたちへも浸透し、今に至っているように思う。

見えない敵ゆえ、手洗い・うがい等の感染対策が疎かになったり、感染者やその家族への誹謗中傷等差別につながる発言等を目の当たりにし、心を痛めたりもした。何より多くの感染者や亡くなられた方がおられることは残念でならない。

常に学校には危機管理が求められており、従

来どおり実施したのでは、子どもたちの「安全」は保証できない。これまでの慣習や経験則はほぼ通用しなくなり、計画時は、ねらいを再考し、それ以上に膨らみ、または、ずれた実施内容や方法を見直し、削除したり付加したりして再構築する。まさに、カリキュラムのマネジメントが求められている。前任校では、「新しい生活様式に従って感染対策に従って行動できるようにする」などのねらいを実施計画案に付け加えた。

学校生活や教育活動がいかに対面や集団を基本として計画されているか、ねらいに立ち返るたびに思い知らされたが、ペアやグループ等での活動を補完するように一人一台端末による学習が導入され、校内外でリモートによる研修会なども増え、その指導法等関連の研修も加速度的に行われている。「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な実現を目指す。

小中一環教育、コミュニティ・スクールである本校は、その趣旨を尊重しつつ、働き方改革とカリキュラム・マネジメントによる中学校と地域との合同運動会を構想している。一日開催か半日か、地域と合同か否かなどの二者択一でない判断をしていきたい。

コロナ禍と言う困難を乗り越えた先にある新しい自校の姿を思い描き、変革を恐れず、形にしようと挑むことが、「令和」の学校づくりに求められる校長の姿勢と考えている。

温故知新

金峰中(南)

石 畑 浩 一

始業式で、「はあすごお」を紹介した。昔あつたキャッチフレーズとい

か、はあすご運動として、私の中学生時代の校長先生が唱えていた頭文字言葉「はあすご」に「お」を私が勝手に付けたアレンジ版である。「は」は「はい!」と応えること、授業や部活動で名前を呼ばれたり、教えや助言をもらったりした時に「はい」と返事ができる素直な心。「あ」は、友達や大人の方に教えてもらったり、手伝ってもらったり、「ありがとう」と言える感謝の心。「す」は、失敗や間違った行動をした時に、自分から「すみません」と言える反省の心。「ご」は、周囲を見たり、観察する中で友達とか先生とかのがんばりや努力に気付いた際、自然な感じで出した言葉、「ごくろうさん」を指す。この言葉は人の行動の良さを認めてあげられる心と言える。これらの言葉は毎日、いつでも実践でき、皆の声として発することができる言葉(ことだま)だから、「はあすごお」を意識し、学校生活を送ってほしいと生徒に説いたのだ。同時におまけの問いかけもした。「はあすごお」には小っちゃなおが付いている。思いつきでいいので、どのような意味があるか、この「はあすごお」に他にどんな温かい言葉が隠れているか、何か気付いた人は、ネット上の学習ドリル(キユ

ビナ)を使って校長先生に回答してほしいとよびかけた。すると、私が考え準備していた答えも、想定外でかつ、優秀な作品も寄せられていた。それらを生徒の頃の姿と思い比べながら読み味わうとともに、この古い時代のキャッチフレーズの含蓄に改めて感謝・感動した。

「ごちそうさま」「ごめんなさい」「おいしかったです!」「おやっとなさあ!」「お礼」「おもしろい」「面白い」「おめでどう」「おはよう」「頑張ろう・楽しもうなどの応援」「お疲れ様」「お父さんお母さん、いつもありがとう♡」などがキュビナ内のメール機能を通して私に届いた。他にも、あいうえお作文的に組み合わせる生徒もいて、子どもの柔軟な発想で、まだまだ、たくさん創れそうである。とにかく、最近の中学生は、校長先生からの問いかけにさつとメール機能で反応できて「すばらしい!・すごお!・すなお!・おりこうさん!」としか言いようがない。



魔法の言葉

赤徳中(大)

土岐 邦寿

先生の一言で人生が大きく変わった教え子の話。A君はサッカーが大好きな転校生でした。サッカーは上手でしたが、生活態度と勉強はさっぱりで、いつも怒られてばかりいました。ある日、運命的な出来事がおこります。

いつも清掃作業していませんとの指摘があったので、始まる前にスコップを手渡し、「溝に灰(火山灰)がたまっているのです、ここからあそこまで全部あげてね。後からチェックするから。」と頼みました。やる気のない返事の後、仕事を始めていました。放課後、側溝を見ると火山灰は全部あげてありました。

それから二週間後の学級PTAでのことです。A君の保護者がニコニコしながらやってきて「先生ありがとうございます。うちの子に指導してください。」と言うのです。「(私)??何かありましたか。」と聞いたら、「このごろ家のお手伝いをしてくれるのですよ。最初は食べた食器を台所に持ってきたことからだったのですが……(中略)一緒に住んでいる祖母がびっくりして、これは担任の先生が指導してくださいました。私は身に覚えがなかったので、次の日、A君に聞いてみました。すると驚きの事実が分かったのです。側溝掃除をしているとき

に当時の教頭が通りかかり、「ありがとう、助かる。ここ一人であるのは大変だけど、綺麗にしてくれてありがとう。」と声をかけられ、それまで怒られてばかりだったA君は誉められるのはとても気持ちが良いことだと感じたとのことでした。それから彼の行動が変わりました。体育の授業には一番でいき、道具の準備をする。部活動の道具出し、道具の片付けも一番でやるようになりました。日頃からいろいろなところで手伝いをしてくれるようになっていきました。

中学三年の十月、県外高校から進学先の候補として話をさせて欲しいと電話がありました。ある大会の試合後、仲間に指示を出しながら、自ら進んで片付けをしている姿が素晴らしく、こんな生徒が欲しいと思ったとのことでした。A君は高校でも活躍し、卒業後、有名企業に就職し、活躍しています。

言葉は人生を大きく変える魔法となります。「魔法の言葉」かけたいものです。



読書案内



■黒川祐次 著

物語

ウクライナの歴史

ヨーロッパ最後の大国

日吉学園(鹿)上

武宏

今年の二月のロシア軍のウクライナ侵攻を契機に、にわかに日本でもウクライナに関する関心が高まっている。本書は、ウクライナ大使を務めた黒川氏が、通史的にウクライナの歴史を解説している。ロシアのクリミア半島制圧(二〇一四年)より十年以上前に出版されているが、ウクライナの歴史を理解するには大いに役立つ一冊である。

ウクライナの歴史はキエフ公国の滅亡後、長い間、独立国家になることができなかった歴史でもあった。一九九一年のソ連崩壊による独立は「棚ぼた」的なところもあり、建国の英雄や

独立運動を象徴するような人物についての記述は本書にはない。今はゼレンスキー大統領が国民を率い、ウクライナが一九になってロシアと戦っているが、それは長いウクライナの歴史の中でも稀なことなのかもしれない。

「国がない」という大きなハンディがあり、ロシアという言語、文化、習慣の似た大国が隣にありながらも、ウクライナはそのアイデンティティーを失わなかった。また、ロシアやその他の外国の支配下でありながらも、ウクライナは独自の言語、文化、習慣を育み、ロシアに併合された後も、ロシア史の中で経済的、文化的に重要な役割を果たしてきた。

しかし、ソ連時代の一九三二〜三三年に起きた大飢饉「ホロドモール」という悲惨な歴史もあった。スターリンの指示による農業の集団化による混乱とロシアへの食糧調達による人為的な飢饉だったホロドモールによる死者は、四百万から一千万人とも言われている。そのため、ウクライナではスターリンによる虐殺と捉えている人が多い。

侵攻から既に五か月以上が経過し、長期戦の様相を呈している。苦難の歴史から得た知恵を戦略的な外交に生かして、ウクライナが現在の苦境を乗り越えることを願っている。

中公新書 八六〇円

■辻井いつ子 著

今日の風、なに色？
（全盲で生まれたわが子が
「天才ピアニスト」と呼ばれるまで）

漆小(始) 榎 元 寛 之

全盲で生まれたピアニスト、辻井伸行さんの、誕生からピアノに興味をもって、ステージに立つまでのことを、母親辻井いつ子さんが心情を綴った実話である。全盲で世に出てきて生きることに対する母親の苦悩、葛藤、努力、なかなか想像しがたい世界がある。

本書の題名「今日の風、なに色？」は、いつ子さんが伸行さんに色を教えるために「リングの赤」「バナナの黄色」などと教えていたことに対して、風にも色があると思っけて伸行さんが発した質問である。障害があっても不幸だけとは限らないと前向きに捉え、子どもをよく見て気付くこと、環境を与えること、一人の人格として見守り信じることを、簡単ではないと思うが、大事なことを学べる。

全盲の天才ピアニスト辻井伸行さんについては知っていたが、母親の辻井いつ子さんの書かれた本書を読むと、親子二人三脚で日々積み重ねてきた努力にまず驚かされる。いつ子さんの前向きさ、行動力、挑戦する勇氣には本当に頭が下がる。そして、母の支えに素直に感謝し、

より喜ばせたい気持ちでピアノに向き合ってきた伸行さんの優しさにも感動する。また、本書を通して、教育にとつて人の縁は大切で、良縁に恵まれた、天才ピアニスト誕生だとも思う。併せて、障害のある子どもへの教育の在り方についても、大きなヒントが隠されている気がする。

公立小中学校の通常の学級に在籍している、発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒の割合は、六・五％と言われる（平成二十四年文科省調査）。また、各学校における特別支援学級数も急激に増えてきている。このように、特別なニーズがある児童生徒が増加している今日、辻井いつ子さんのように、その子の気持ちに寄り添い、特性にも配慮しつつ、マイナス面ばかりではなく、プラス面に積極的に働き掛けて、より良き方向へと導いていくことが求められているのではないかと改めて感じる。

株式会社アスコム 一五〇〇円

■大村はま 著

教えるところはいと

上西小(熊) 畑 真一郎

本書「教えるということ」を若い頃に読んだことがある。大村はま先生に対しては、国語教育の実践家という漠然とした印象しかなかった。あれから三十年以上経ち、再度読んでみた。先生の教育者としての真摯な取組や教育観に対して、決して上辺で理解してはならないと思っただ。また、時代が変わっても教育関係者のみならず、その教育観や生き方に共感する人が絶えないのは、強い信念をもった人としての魅力にほかならないと思った。

大村はま先生は、明治三十九年に横浜市でお生まれになった。東京女子大学を卒業後、長野県と当時の東京府の高等女学校で教壇に立った。戦時中は学校が軍事工場になり、教育の場を失うという辛い経験もしている。終戦後、新制中学校へ赴任した。長い混沌と窮乏の中、すっかり勉強から離れた子どもたちを目の当たりにして、教師としての奮闘が始まった。この頃から、自己の教育観を築き上げていったのではないかと思う。先生の子どもの観に「子どもというのは身の程知らずの伸びたい人」「一歩でも前進したくてたまらない、力をつけたくてたまらない、燃えている、その塊が子ども」とある。その子ども観に基づいた、プロの教師としてあるべき姿が本書で紹介されている。「研究をしない教師は先生ではない」教師自身が研究で苦しむと喜びをひしひしと感じることが学んでいる子どもに寄り添うことだと説く。また、「分かりましたか、静かにしなさいは禁句であ

る」「自己研鑽もなく子どもがかわいいだけなど子どもがかわいそう」などがある。自分の担任時代を振り返ると自己反省ばかりである。現在、子どもの育成はもちろん、職員に対しても育成していく立場にある。「学力をつけてください。」「自分の職務に責任を持つてください。」「だけでは、職員の気持ちは変わらない。職員指導は、知と情が必要だと教わったことがある。今後、本書を手元に置き、知と情についての示唆を得たいと思う。

■岸見一郎・古賀史健 著

嫌われる勇氣

喜界小(大) 田 中 省 一

夏目漱石『草枕』の冒頭にある「智に働けば角が立つ、情に棹させば流される、意地を通せば窮屈だ」の一節、漱石も人づきあいに悩んでいたのだろうか？そんなことを考えていた折、「人間の悩みはすべて対人関係の悩みである」という書籍広告のキャッチコピーと、『嫌われる勇氣』という哲学的雰囲気漂う書籍名に刺激され、購入した本である。読後、私の人づきあいの考え方が軽くなったことは間違いないの

で、本書で使われている用語や例えを交えながらアドラー心理学の本書を紹介したい。

「人間の悩みは全て対人関係の悩みである」と言い切るアドラー心理学では、まず、自分の課題と他者の課題の分離からスタートする。上司や先輩の機嫌を損ねたくないという気持ちから、いやでも飲み会に参加する人は、常に他者が自分をどう思うかに不安を感じながら生きていることになる。飲み会に行く行かないを決めるのは自分の課題、飲み会に来なかつた人を上司や先輩がどう思うかは他者の課題である。まず自分の課題と他者の課題を分離できるようにする必要があると述べている。

次は、「自分が幸せになるために、他者に嫌われる勇氣を持ちなさい」という言葉である。他者の評価や承認を気にせず、自分の生き方を貫きなさい。対人関係が壊れることだけを恐れて生きているのは、他者のために生きる不自由な生き方になってしまう。他者の評価や承認を気にする縦の関係ではなく、横の関係を構築しなさいと述べている。そして、横の関係の中で、自分が他者に対してできることを実践すれば、他者に貢献できた喜びを感じ、自己の価値に気付き、本当の自由・幸せを手に入れることができるようになる。難解な専門用語がほとんど使われていない本書は、私でも楽しく読むことができた。漱石にもぜひ勧めたい本である。

ダイヤモンド社 一五〇〇円

以前勤務していた県立の青少年社会教育施設では、年間延べ六万人を超える来所者を対象に、様々な研修（活動）プログラムの指導を担当してきた。来所者は集団宿泊学習で来所する小・中学校や高等学校の児童・生徒のみでなく、幼児から高齢者までの方々が研修や主催するイベント等の参加などで施設を利用してくださっていた。

研修を目的とした入所団体には、キャンプやウォークラリーなどの「野外活動」や竹とんぼや塗り箸などを作る「創作活動」、キャンプファイヤーなどの「交歓活動」などの活動プログラムを準備し、できるだけ団体の希望に添って実施できるようにしている。私が勤務した三年間では、「野外活動」の「カーヌー体験」が一番の人気プログラムだった。九十三人が

定員の大型カーヌーで施設近くの川を上ったり下ったりする

活動は、日常生活ではなかなか体験することができないので、特色ある活動だと思っていた。

一方、「創作活動」で人気があったのは、「サンドグラス」という飾り物だった。一辺が5cm程のキューブ型のガラス容器に色砂を少しずつ敷き詰め、いろいろな模様作りを楽しむ活動である。一般的にはカラーサンドアートと称して色砂を使う創作物はあるが、市販の着色した砂を使用することが多い。しかし、施設で使用する色砂は職員の手作りである。近くの海岸の砂を採取し、「洗浄と異物除去、乾燥、着色、ふるいかけ」などの工程を経て、カラーバリエーション豊富な色砂を完成させる。自作ですごく

趣味・文芸

ふるさと自然の素晴らしさを子どもたちに伝えたい

状態のよい色砂に仕上げることにもだが、地元の砂を使っていることが素晴らしいと思っていた。

また、施設の敷地内にはシイの木がたくさん植えられているため、毎年大量のどんぐりを集めることができる。施設にはどんぐりを材料とする創作活動はいくつかあるが、「どんぐりストラップ」は比較的新しいプログラムであった。作り方は簡単で、どんぐりにストラップと小さな鈴をつけるだけ。安全面に注意すれば小学校の低学年や幼児も作ることができる。どんぐりはそのままでもよいが、大きなものはペンタイ

知覧小(南) 宮本 京也

プのボスターカラーで色塗りをしてもいいし、小さいものならニス塗るだけでもきれいな飾り物になる。身近にある素材を使って気軽に創作できる活動も魅力があると思っていた。

このような経験を積んで赴任した前任校も豊かな自然に囲まれ、素材も豊富な地域だったので、それを教育活動に取り入れ、子どもたちにもふるさと自然の素晴らしさを伝えることはできないかと考えた。まずは、学校の近くの公園からマテバシイのどんぐりを採集し、「どんぐりストラップ」作成し、校長室内に飾ってみた。また、夏の大形台風により桜の枝がたくさん落ちたので、それを材料として「桜の枝のストラップ」も作成した。部屋に飾ってあるものを昼休

み等に子どもたちに見せた。一年生に一番人気があったのはニスで仕上げたどんぐりだったので、生活科の時間に子どもたちが集めたどんぐりを使用して、ストラップづくりをした。二年生は収穫したサツマイモを使って収穫祭をしたということだったので、社会教育施設での経験を生かして校庭で焼き芋作りを指導した。焼けるまでの待ち時間を利用して、「マシユマロクラッカー」や「空き缶ポップコーン」を子どもたちに挑戦させた。これも施設での経験を生かすことができた。どちらも子どもたちに好評だった。

また、全校朝会でもできるだけふるさと自然の素晴らしさを子どもたちに紹介した。学校近くの一級河川には、秋の終わりがくから越冬のため

てくるので、フィールドスコープを使って撮影した鳥の様子などを紹介した。その後も何度か野鳥にまつわる講話を全校朝会でしたが、子どもたちから「昨日家の庭でシジュウカラを見かけたよ。」等という声が聞こえてくるようになった。

社会教育施設で出会った創作活動や野鳥の撮影などが今では趣味となっている。本校も前任校同様、自然の豊かな地域であり、子どもたちにその素晴らしさを伝える活動をしたい。また、身近にある地元の材料を使ってものを作る楽しさを本校児童や保護者、地域にも広げたいき、それが感性豊かな子どもへの育成に繋がればと思っている。

郷土の紹介



歴史と伝統を引継ぎ、つなぐ

別府小(南) 下曾山 隆

一 はじめに

本校は明治維新直後の寺子屋の創設から、学制発布に伴い明治六年に石垣、水成川、大川、松永の四小学校が設置され、その後松永小を廃止して、三小学校の統合によって、明治十九年別府高等小学校となり、現在に至っている。

明治から令和にわたる永い歲月は、本校の尊い歴史であり、幾多の苦難を克服してきた堅実な歩みの実証でもある。家庭には、大きなアコウの木がそびえ立ち、子供たちの成長を見守っている。



(番所鼻公園から見える開聞岳)



(150周年記念 横断幕)

二 穎娃町の特徴

黒潮寄する東シナ海を眼前に控え、朝な夕な麓 薩摩富士(開聞岳)を仰ぐ、この恵まれた自然環境と、古くからの海外交易によって培われた進取の気性に富む別府の人たち。「正しく、やさしく、強く」の校訓のもと、別府小の伝統は、育まれてきている。本年度は、明治六年から数え、創立百五十年という節目の年であり、秋には記念式典等が計画されている。地域・家庭の協力は絶大で、地域の中の学校として親しまれている。また、地域の方や保護者と会話する中で、「昔は、児童数が千名を超えていた。南薩で一、二番目のマンモス校だった。」という話をよく耳にする。しかし、児童数は減少し、本年度は、児童数百十二名の小規模校である。

薩摩半島の南の端に位置する南九州市穎娃町は、人口約一万一千人の小さな町である。広大な茶畑が広がり、栽培面積・生産量で日本一の産地であり、農産業がさかんな地域である。昔は、港町としても栄えていた。また、さつまいもや大根作りもさかんであり、冬になると、真っ白な大根やぐらが登場する。季節の移り変わりを肌で感じる事ができる豊かな地である。平成十九年十二月に川辺町・知覧町・穎娃町が合併して南九州市になった。本校区には、観光名所である「番所鼻公園」があり、日本地図作成のため全国を実測した伊能忠敬が「天下の絶景」と絶賛した景勝地として知られている。目前の海には、幸運の守り神と言われる「竜の落とし子」が棲んでいる。そのため、学校の前を多くの観光バスが往来している。また、「釜蓋願掛け」や素

焼きの釜蓋を投げける「釜蓋投げ」で有名な「釜蓋神社」もある。

三 郷土に学び、郷土を誇りに

校区には、戸柱公園、石垣港、水成川農村公園、番所鼻公園、釜蓋神社、前瀬鼻自然公園(えびす神社)、児玉栄寿記念碑(石垣用水路の建設に尽力)、各商店等が点在しており、郷土素材に恵まれている。地域の素材(ひと・もの・こと)を活用した様々な教育活動を通じて、郷土の歴史や特色、よさや人々の工夫等を学んでいる。また、二月には、四年生が十歳を祝う「つばなれ式」を実施している。郷土に学び、郷土を愛し誇りをもち、郷土の発展に尽くそうとする子供の育成(人づくり)を推進していきたい。

四 おわりに

「本校児童の交通事故ゼロが何十年も続いている」ということもよく話題になる。まさに、「地域の力」だと実感している。四月に本校に赴任して三か月が過ぎようとしているが、地域のひと・もの・ことを少しずつ学んでいるところである。基本的な感染症対策を徹底し、教育活動を展開している日々であるが、教育の本質、本当に大切なこと等を考え、学校の在り方を模索している。

この地に勤務している間に、南九州市(穎娃町)の魅力を発見すべく、時間を見つけて探索していきたい。

*** こころの詩 ***

朝顔の蔓

垣がひくうて
朝顔は、
どこへすがると
さがしてる。
西もひがしも
みんなみて、
さがしあぐねて
かんがえる。
それでも
お日さまこいしゅうて、
きょうも一寸
また伸びる。
伸びろ、朝顔、
まっすぐに、
納屋のひさしが
もう近い。

金子みすゞ

一般財団法人校長会館だより

教育長異動

○新任 令和四年八月一日付

伊仙町 伊田 正則氏

(元山中学校長)

季節の言葉 「百日紅」

朝雲の故なくかなし百日紅 水原秋櫻子
初夏から中秋くらいまでは盛んに咲きつづける百日紅。生命力に溢れたその姿は意気軒昂という感じで圧倒されるが、だからこそ逆に、ときに見る者の心の弱さを暴き出すようにも働く。朝の雲を「故なくかなし」と見つめることになったりする。



編集

後記



書くという行為は、なかなか難渋なものです。筆不精の私の場合、書くことが決まるまでに時間がかかります。書き始めても、内容の核心部分が揺れ動いて、筆（今は、タイピングです）が止まり、そのうち、妙な関連付けをしたり、見栄が出てきて話が針小棒大になって良心と葛藤したり、自分の考えや実践に疑問が湧いてきたりと、迷い続けます。

稀に一気に書き上げることもあります。読み返すと、やはり、「これでいいのか。」と自問自答が始まります。

出来上がった文章は、期限切れによって手放すといった次第ですが、書き上げるまでの時間は、それなりに意味があるように思います。だからといって、また書きたいと思うほど意欲的ではないのですが……。

皆様は、いかがでしょうか。

今号は、一学期の教育活動真っ盛りの時期に原稿執筆を御依頼いたしました。学校経営が軌道に乗り始めた時に、あるいは、軌道修正を図らねばならない時に、はたまた、緊急に対応を迫られる事案が発生した時に、貴重なお時間を割いて執筆してくださいだったので拝察し、心より感謝申し上げます。

一つ一つの原稿を拝読し、私に足りないことを再認識しつつ編集作業を終わらせ、夏季休業の終わりにお届けすることになりました。

二期を目前にして、今号が少しでも皆様のお役に立つことを願っております。

鹿児島市立喜入小学校 内村 英人